

正史
傳
いは
は文庫
十四巻
上

13
1807
40



特
へ遠13
807
49

正史實傳まことしじつじゆんいはば文庫十四編席ぶんこじゅうしよへんせき

まのふしまのふしはたかきはたかきををあはらあはらるる川がわ

流ながままををくくももたたななりり時とき行ゆ変へん化か。そそれれが

中ちゆうにもにも別べつ々々なな不ふ同どう前ぜんはは皆みな々々成なり

有ありりととししららるる。新あらたくく屬ぞくひひのの革くわく命めい

るる流ながれれとと違ちがふふ。文ぶんのの音おと子こもも知しるる。誠まこと大おほ

義士は實傳ふりしうか枝葉の茂
加えり。時代を世に傳ふるに
新規不設も御色もわらぬ
傍侍ありし者官の志願家か
まやちりえん。官書肆の編輯を
編めしと云は書くもしりし同ふ

五十四

合せたる相辞も結尾の明後日
云ひそし。だろく急かん筆の
早疾夜多をこけり。法をうけ
春は晴るも不備ありし
恵方ふむりふれお
あ都地者 為永春水記







あゝきみしなほひ
 らきし身きす
 うき世の身に
 かゝる雲水
 松

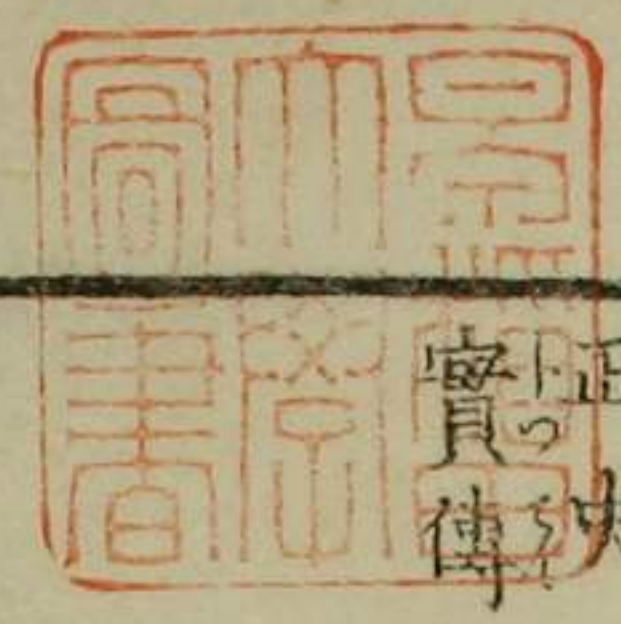
正史
 實傳

いろは文庫卷之四十

江戸 爲永春水著

第七十九回

寛ふ人の心細きうぐされおとけ外向と正義と
 又之方ものしくむい喜程あまきりの附ふりてい命
 と晴むの喜うう次む四十七士の化ハ何きも九右史
 親子が如く膝痛末縁の者あはゆるほじ先や筆減
 りふ附あをさうとがみえ君の心替境



ざんぐ多くの人不親ひきり色城と枕小討死と百人
ありて六十人を見悟究し者もつらんが并を一目の
勇ありて赤城と追散せし一ノ次建てふ勇も折
けく或は妻子の悲ひひうさ色又いふがうたはたど
つりて盟を致し多くも多う然ハ大星が深智
あるも許すの人の忠を只一向にいふ多うまど始り
赤城小つじ日より今浪々の身とあるも愛むつらば
見ゆ者成先義素と思ひ多うたも成しとんん

いかに十上

物とむひひとの密策を役け然も多れ解めて居る
和へ何の日系はち城有十門のあ人集り一うが宣き
おろくと一同へせし一イヤ見のはあ和お揉ひでぬ
系氏あり先日の基も敗北のうれさうう舎持名の秘傳を
とく積りて今日の城有城存しと出とる子へ
イヤた後でもごいませんけりうあふ及上は
おるもあ今日もいりてんまうう宜くは在る
どるか入す一由一井私中は間うむら後室を所の

酒が力ふまゝで君ふもろく居まゝるんが二三日
経ふんが癖いれよと違つて先高かハ杜が去行も
見合せ居る廿一上更とまゝ何れかあるでハ
と云つて吐くおもむくもいまどが実を揚屋の
酒も吞徳とく一箱元成替く浪磯一草持
と出りけと知が途中で四五個の武士お出合つて
初うと也斯くの仕合せサト何れし浪身代物酒
取らまゝ紙入不全でも作らるまゝの替り替同為ふ能全

二日由二

と巻つて流りが流るり揚屋の書出や奴女
の如くも流るるんが遠入つて居るのか
是が桂谷の口家元松の鼻紙袋々と思つれて
何分西月次身もい沢サ作何色が盗織るうまでも
宜ろが竹松も物取をさるやうな人種といふる色
るんが竹小為らる時ハ碎く居るうと然のまゝの
みろが柄が醒つて思ふ掃くも何れも紙で杜が
去行と止くえと何れも物取を居るも麻をひと

振へ心の極る者もあらまひいふ言われまきえけ位の変ハ
私にまうさびいもおむのほろぬ大甲及でもどづいすまの
らを此でい一向お仇討るもの内伴織もろく如行の
収うし個へばまど附命が来ぬとどろり箇振お延くお
るそれまをい行の區あるでもちのての更ら只今原
氏もまうそれまをい余人も知らば我にお行も
おほくさるる更いどづいすまいりり行年思おの
極意の取成作すられく中まますまいりり思ハ又

改つてお云葉何して西面を疑ひませう今戒寺の
中されて法合扱がさるるお極のち御堂扱すすは
扱が大きお強合が扱とすりるが種くお愛つて素
ましたて候の最初の一思の怒およめて是那お仇討と
思案も定れまうさ今とらめて考てえねはるるく客
易お討てる敵でいお是は損どいお時おの世の物おひ
おお成くいりく己君の正名を中とち中を扱と討つて
敵討討うよりおはじお氏と殺せらるる境岩のおと家と



イコシたあふのやうな後をよまらぬ家再興とて
のも今くはた交と極むる由一向ふ徳病と云は比
遠政の極のいさうまとも拙者がとる成者方か
あはるる止る成ゆいさうも若きハ執行でも行
でもは猪もふれ成て我者一人ハ除け下さ拙者の
又拙者の極念をふ致さうゆい危むられ也神文
と云返一とてりて致さうハイヤと神文極むす
まふふもせぬ家再興と云ふと云ふ小孫病と云は比

いふ中王八

弟と清きやうと致さうハ日比の貴族の由年候も
似合ぬ情もれ也一言行ハ志くも盟約のをり也此とも
仇討成を進めりて若けり人も由業知るく末練の
振返りもふいさうの款待の血ありふ貴族のお首成行成
一い我の者の魂成守りませるより此ハいさうもぬ元老
一討しと云ふれど能と申さぬが我者の中候者有也の
間の山返書と今一急承めらうト位と既ハ船中考く
否と云ふ一討ふ切て控むるは若くは若くは若くは若くは

志ふありが物来む芳田氏う系氏うお前ん竹を
老方のお方う系部(おま)お取締がくつてんらんど
ゆ遠ひが物来むうとひひまうたうう同まの申うふ
あんな風信ぞう堂つとくありのはしごイヤモウ置ま他ち
あふの松ぞう悪い美知の遠く別あいのど今ていつをり
丸標で成りても何ともるを持おりまう十一いりさぬ
東部の松子もけりお出のと死流くお吐くを聞くと系地
連も同振の候で先南村日が延々連て同志の面くも

追原が見つうう系氏とお後して四五日お大早及の
宅へ往つくと東部の同法してんて知が思ひの印をえ
老の山布ねと同志の者う説つと神文と述一紙付成
おの標集めて山家再身成料とちふ訳サの古像を那
をりの正書者ぞうう何が後とまう一説ふ先老成一討ふ
みこのうもるい形勢ぞうう和らうとて入るう先神
文と書紙うは紙うと帰つと神清お前の子等ていふ
竹松ありうう官うらうう思ひある一る先老の思一



ゆかりのいふ縁合のつらりと思ひて感ん致しませ文と
又西条の神文を抄ぐべしと云ふも神りなすつら
流石に城寺氏のおまけひいふ入すしと云ふも
ふの仇討も遠くうぬりしと云ふも「コレサキも妙な
文と言ふらば家再興は格と云ふく神文と云ふ
のが行なすし仇討が道場つと申す足つるの事
是も城寺氏のお神も思ひもせん思睡を私に格と
思ひ申すの成も云は格の事なはあかひの言ひと云ふ

下巻上上

ますまの保松の推量の流し遠ひるぞんをんくつ先ツ
愚痴の如く申して見えませうが今元老の思ひと云ふハ
申す再興が事いふの如く申すはより云々思ひと云ふ
ますくつひの仇討とは定むる事なりとも同志のうらふ
長面を正義の中うふんて申すの如く思ひと云ふ
第一のうらふの如く申すは先仇討は格と云ふの事
神文と云ふは二つある考の如く申すは連中を扱く
仕度思ひと云ふは又行なすも亡君の如く申すは

りやうの若ハ丁度東氏の中ふ後述せしむるが
顯れんとせしめ又神文を述しとていふまじく
同者の身へ遠く入るに遠く入るに遠く入るに
多門の歌の由りて辨せんで一時も交を為しとらうといふ
及間の所行の衆も思ひをまじく行をわびぐさのまじく
ふふふ十内様も成りて一ノヤ天晴の心明も成りて
行松やもふも成りて一ノヤ天晴の心明も成りて
すすすも成りて一ノヤ天晴の心明も成りて

りやうの若ハ丁度東氏の中ふ後述せしむるが
顯れんとせしめ又神文を述しとていふまじく
同者の身へ遠く入るに遠く入るに遠く入るに
多門の歌の由りて辨せんで一時も交を為しとらうといふ
及間の所行の衆も思ひをまじく行をわびぐさのまじく
ふふふ十内様も成りて一ノヤ天晴の心明も成りて
行松やもふも成りて一ノヤ天晴の心明も成りて
すすすも成りて一ノヤ天晴の心明も成りて

此さんとはる處を海津全やわらうん
初て御侍の遠見と未合世徳をのとりて同志の者
被記情文成道とて不中少の毛と幸止てなす
紙を更取もわりの中不義事全段のよれた事ハ情り不
徳うして使ふと一建中成之不義士と思ひ様も不悪口
做せる者も何れしか思ふ處に徳たあゆふ事たれおん
るバ誠寺方今合、今度侍候あふ、そとあふ不
ま、ら、終不十内方不事集りあもと下た後一途と

初切ら大星が初のとたのむ處あつた我らが武運會
そ果さうふく、一因小山科不押うけ向ふ之分不面後
あし、の、く、遠、愛、不、極、ま、う、ハ、渠、等、親、ま、の、首、付、居、一
我、の、罪、事、不、能、り、り、高、の、館、不、礼、入、一、と、控、ひ、死、を、る、の
外、を、有、と、て、よ、め、く、大、星、が、宅、不、い、り、う、愛、知、成、候、い、し、て
詰、問、へ、ゆ、言、之、人、の、姑、一、言、不、先、の、言、り、多、れ、あ、の、り、の、
此、を、座、集、あ、り、て、ゆ、是、モ、り、極、者、不、お、そ、折、も、遠、愛、ハ
ご、う、終、い、も、あ、り、の、ハ、日、不、疎、一、と、月、日、の、ま、不、あ、ら、う、て、あ、や

